

峠の我が家

陽香

まひる・・・陽香の妹

男

由紀子・・・2人の伯母

本宮・・・陽香の元夫

芹那・・・陽香と本宮の友人

女A

女B

女C

カフェ女店員

カフェ店員

カフェ女性客

女子高生A

女子高生B

女子高生C ※女A,B,Cと同でも可。

ミスタードーナツ店員

外国人男性A

外国人男性B

サーファーA

サーファーB

そのほか、サーファー数人

○海水浴場（回想）

男が歩いている。

2人の少女・幼い陽香とまひるが、手を繋いでその後ろをついて来る。

陽香は首からコンパクトカメラを提げている。

陽香「まーちゃん見て。海だよ」

陽香、海を指差す。

まひる、海を見ている。

陽香、まひるの手を離し、首から提げているコンパクトカメラを手に持つ。

使い方がわからない。

男、陽香の隣にしゃがみこむ。

男「ここがファインダー」

陽香「ファインダー」

男「そう。ここから覗く」

男、ファインダーを陽香の目に当てる。

男「それで」

男、陽香の指をシャッターの上に乗せる。

男「これがシャッターだから。ここを押してごらん」

陽香、言われた通りにシャッターを押す。
カメラから「カシャッ」という音が響く。

陽香、カメラから目を離して男の顔を見る。

まひる、海の方へ歩いて行く。

陽香「あ。まーちゃん！」

陽香、まひるを追っていき、手を繋ぐ。
2人、並んで海の方へ歩いて行く。

○ 団地の一室（乱雑な部屋）

カーテンが閉められている部屋。
由紀子、カーテンを開ける。

由紀子「まぶしい」

日差しが部屋に差し込む。
光が部屋に充満する。

書類、写真、途中まで写真が入れられているアルバム、手のひらサイズのツボ押し棒。何粒か食べた後の粒ガム。茶筒、固まった絵の具がついたままのとき皿、筆。絵葉書。
一部は床に散乱しているが、大部分は整理され、段ボール箱に入れられている。

玄関が開く。
陽香、部屋に入って来る。

陽香「ただいまー」

陽香「やっぱりお留守だったわ」
由紀子「ああ、やっぱり」
陽香「夕方か、明日、また行ってみる」

由紀子、ビデオデッキからビデオテープを取り出す。
ラベルに【海 92】と書いてある。

陽香「ん？ビデオ？」
由紀子「ああ。押し入れに入ってた」
陽香「かーさんマメに撮ってたからね」
由紀子「まだ何本もあるよ。あんた持つとく？」
陽香「とりあえず箱に入れておいて」

陽香、部屋の中を見渡す。

陽香「あんなにたくさんあった、細々としたモノたちが」
由紀子「だいぶすっきりしたね」
陽香「捨てたモノたちも、かーさんが見たら「捨てないで！」って言うね」
由紀子「そこは容赦なく。ばさっと」
陽香「死人に口なし」
由紀子「ふふ。夢の中で怒られそう」

由紀子「ねえ、お腹すかない？」
陽香「あー。買ってあげればよかった。ごめん」
由紀子「出前とっちゃおうか」
陽香「そうしよっか。なにがいい？」
由紀子「はーちゃんは？」
陽香「なんでもいい」
由紀子「えーどうしよう。なにがある？」
陽香「ピザそばラーメン、かな」
由紀子「うーん。…ラーメン」
陽香「おっけ。なにラーメンがいい？」
由紀子「なにがある？」
陽香「醤油、味噌、塩、もやし…あとなんだっけな」

陽香、部屋の隅、固定電話の横からメニュー表を取って由紀子に渡す。
由紀子、メニュー表に目を通して、

由紀子「五目そば」
陽香「おっけ」

陽香、固定電話のダイヤルを回す。

陽香「もしもし。出前お願いします。もやしラーメンと、五目ラーメンと、」

由紀子「あ。はーちゃん待つて！」
陽香「すみません、ちょっと待ってください」
由紀子「やっぱりレバニラ定食にして」

陽香「すみません、五目ラーメンやめてレバニラ定食で、あと、餃子ひとさら。はい。団地 2 号棟の 403、橋本です。はい。はーい」

陽香、受話器を置く。

陽香「20分くらいだつて」
由紀子「けっこうかかるね」
陽香「うん」
由紀子「もう少し頑張ろうか」
陽香「そうね」

2人、整理を再開する。
由紀子、窓の外を見る。

由紀子「いい天気ねえ」

陽香も外を見る。

陽香「ほんとだねえ」

○公衆浴場（女風呂・脱衣所）

中高年の女たち、服を着たり身体や髪を拭いたりしながら談笑している。
由紀子、ドライヤーで髪を乾かしている。

女A「あっついね」

女B「え？あつい？」

女A「暑い暑い。汗止まんない」

女B「あ。ちょっと」

女A「ん？」

女B「背中に長いの1本」

女B「ちょっと待って」

女B、女Aの背中についている髪の毛をつまみ取る。

陽香、浴場から出て来る。
脱衣カゴからタオルをとり身体の水・汗を拭う。

女B「はい、とれた」

女A「ああ、ありがと」

女B「あんたあれよ。髪長いから。髪洗ってる間にのぼせちゃうんだよ。だからそんな暑いんだよ」

女A「そう？」

女C、浴場から出て来る。脱衣カゴの方へ。

陽香、扇風機の前へ移動し涼しい風に当たる。

女B「そうそう。絶対そう」

女A「そうかな」

女B「そう。絶対そう」

女C「ああ今日あれか」

女B「なに？」

女C「天皇陛下さま」

女A「あれね。最後の公務つつってね」

女B「あー。あれね」

女C「今日ハワイアンズ誰も入れないって」

女A「そうなの？」

女B「宿泊もダメって。なんかあったら困るから」

女A「そうなの？ハワイアンズはすごいねー」

女C「一日や二日休んでも赤字にならないよ」

女B「すごい金かけたらしいからねえ」

由紀子、ドライヤーを元の場所に戻す。

由紀子「はーちゃん化粧水貸して」

陽香「え。持って来てないよ」

由紀子「え、持って来てないの？」

陽香「うん。ごめん」

二人、脱衣カゴの方へ戻る。
陽香、服を着始める。

女B「金。まだもらってるんじゃないの」
女C「もらってるよ、まだ。絶対そうだよ」
女A「そうよねえ」
女C「絶対もらってるね」

女A「化粧水使います？」
由紀子「あら、良いんですか？すみませんー」

女B「もらえるものはもらえるうちにもらつといた方がいいからね」
女C「そうね」
女A「もらえるうちにね」
女B「そうそう」

女A「あ。はるかちゃん」
陽香「はい？」
女A「昨日、まーちゃん大きな声で歌ってたねえ」
陽香「え。ほんとに？」
女A「気持ちよさそうにさ。夜」
陽香「何時頃ですか？」
女A「何時頃だっけな。私が寝るちょっと前くらいかな」
陽香「えーすみません。全然気づかなかった」
女A「いや、全然良いんだけどね」
陽香「いやいや。すみません」
女C「はるかちゃんも大変だしねえ」
女A「お母さん、1年くらい？」
陽香「ええ。来月でちょうど」

由紀子「今やっと部屋を片付けているところなんですよ」
陽香「あ。伯母です。母の妹で」
由紀子「あー、ごめんなさい。ご挨拶もせず」
女A「ああ、そうなんです。私同じ棟で」
陽香「2つ上の階の。ちょうど真上の部屋なの。加賀美さん」
由紀子「そうなんです。姪がお世話になっております」
女A「いえいえそんな」
由紀子「生前は姉がお世話になりました」

一同「いえいえ」「こちらこそ」など口々に。

女C「泊まりで？」
由紀子「ああ。今日一旦帰るんですよ」
女A「お住まいは？」
由紀子「郡山です。通える距離だから。すぐ来るつもりで」
女C「ああ。そうなんです」
女B「それなら良かった。まーちゃんのこともあるからね」
女C「はるかちゃん大変だと思うけど」
女A「そうそう。出来ることがあれば」
女B「できることがあれば言ってね」
陽香「はあ。ありがとうございます」

由紀子「はーちゃん髪乾かす？」

陽香「あー。いいや」

由紀子「じゃあ、そろそろ」

陽香「うん。いこうか」

由紀子「それでは。お先に失礼します」

「気をつけて〜」「またー」など口々に。再び別の話を始める女たち。

○ 車内（大通り～駅前）

運転をしている陽香と助手席の由紀子。

陽香「おなじ団地は、加賀美さんだけ」

由紀子「ああ、そうなの」

陽香「悪い人たちじゃないよ。親切だし」

由紀子「そう」

ペDESTリアンデッキとバスロータリー。

いくつもの飲食店や図書館を擁した大きな駅ビル。

陽香「おばちゃんほんとにバスでいいの？」

由紀子「平気平気」

陽香「少し待ってもらえば車で送れるけど」

由紀子「本宮くん今日だっけ？」

陽香「いや、本宮くんが来るのは明後日」

由紀子「あーそっか」

由紀子「よろしく伝えといて」

陽香「おっけ」

バスロータリーの近くに車をつける。

由紀子「ありがと」

陽香「いえいえ。ここまででごめんね」

由紀子「はーちゃん」

陽香「ん？」

由紀子「あれ、考えてくれた？」

陽香「ん？どれ？」

由紀子「家の話」

陽香「ああ。ね。どうしようかなあ」

由紀子「うちに来て良いんだからね」

陽香「うん」

由紀子「むしろその方が安心だし。私が」

陽香「うん。ありがと」

陽香「まーちゃんとも話して、もう少し考えるね」

由紀子「うん。まあゆっくりで良いから」

陽香「ありがと」

陽香「どちらにせよ、まずは片付け頑張るわ」

由紀子「そうだね。またすぐ来るから」
陽香「ありがとね」

陽香「本当にありがとう」

由紀子、車から降りる。

由紀子「じゃあ、またね。連絡するね」
陽香「うん。気をつけてね」

由紀子、手を振り去って行く。
陽香、由紀子が見えなくなったのを確認してから車を出す。
すぐ近くの大通りに路上駐車をして、目を瞑る。

車の窓を叩く音。

芹那「おーい。はっち？」

陽香、声に気がつき目を開ける。
芹那が「おーい」と言いながら助手席側の窓を「コンコンコン」と叩いている。
陽香、窓を開ける。

陽香「ごめん、寝ちゃってた」
芹那「いや全然。うしろ開けれん？」
陽香「あーちょっと待ってて」

芹那「開いた。ありがと！」

芹那、キャリーバッグをトランクに仕舞うと助手席側に回り、車に乗り込む。
陽香、車を出す。

芹那「ごめんね。待った？」

陽香、腕時計を見て、

陽香「ううん。全然待ってない」
芹那「あ、そう」

芹那「久しぶりだね」
陽香「えーそう？」

陽香「そうでもないよ」
芹那「そうでもあるよ」
陽香「先月私が東京行った時会ったじゃん」
芹那「あ、そっか」
陽香「そうだよ」
芹那「いや。あれ先々月だよ」
陽香「あれ、そうだっけ」

芹那「はっち、痩せた？」
陽香「え、そう？」
芹那「痩せた気がする」
陽香「そうかな」

陽香「あーでも。まーちゃんが少食だからね」
芹那「ああ。一緒に住んでる人につられるよね」
陽香「そうそう」

陽香「うち行く前にまーちゃん迎えに行っても良い？」
芹那「もちろん」

○カフェ

4人がけのテーブル席が2組。
一人客も座れる仕様の、椅子が8脚並べられている大きなテーブル。
カウンター席が4席ほど。

夕方の閑散とした時間で客は女性客が1人だけ。

まひる、レジ横のショーケースにマフィンを並べている。

まひる「14。15。16。17。…17個ですね」

マフィンを入れていたトレイを後方の作業台に戻す。
その横にはさらにマフィンの入っているトレイがある。
その、さらに横には空のトレイ。
それらを重ねたり整理したりしている。

まひる「これはこっちに移して」

まひる「これもこっちに移したら」

まひる「これをここに置けますね」

動作を声に出しながら丁寧に作業をする。

客「すみませーん」

まひる、レジカウンターから調理場の方へ向かって、

まひる「すみませーん」

「はい」という声とともに調理場から別の女店員が出て来る。

女店員「注文？」
まひる「注文です」

女店員、客の方へ行き注文をとる。
扉が開き、陽香と芹那が入って来る。

陽香「こんにちはー」

注文を取り終えた女店員、陽香の顔を見て「こんにちはー」と、会釈。
レジカウンターの方へ戻る。

2人、開いている席に座る。

女店員「まひるちゃん、上がって良いよ」
まひる「はい。上がります」
女店員「お疲れ様でしたー」
まひる「お疲れ様でした」

まひる、調理場を通り奥の従業員控え室へ入って行く。
女店員、メニューを持って2人の席へ。

陽香「今日は友達遊びに来てくれたんで。ちょっとお茶していきますね」
芹那「近藤です。はじめまして」
女店員「はじめまして。東京から？」
芹那「はい。橋本さんとは大学からの付き合いで」
女店員「そうなんですか。じゃあもう、長年の」
陽香「ええ。もう15年？以上、ですね」
芹那「えっそんなに？」
陽香「すごいよね。いま自分でもびっくりした」
芹那「長くてしかも速いね」
女店員「年々速くなりますよー。ふふふ」

陽香と芹那、「こわい」「やばいー」など口々に。

女店員「ご注文。なににされます？」
陽香「ああ、すみません」
女店員「いえいえ」

陽香「はい」と、芹那にメニューを渡す。
芹那、メニューをぱらぱらとめくる。

陽香「プリン美味しいよ」
芹那「おー。じゃあプリンにしようかな。でもマフィンも良いね」
陽香「マフィンも美味しい。どっちかは家に買って帰ろう」
芹那「じゃあ、プリン買って帰りたい。お風呂上がりに食べる」
陽香「おーそうしょ」

陽香「じゃあ、私はアイスコーヒー単品、彼女がマフィンのセットで、飲み物が…」
芹那「あたたかいコーヒーで」
陽香「あと、持ち帰りでプリン3つ」
女店員「アイスコーヒーおひとつと、マフィンのセット、お飲み物はホットコーヒーですね」
陽香・芹那「はい」
女店員「プリンはサービスで」
陽香「えー。すみません」
芹那「ありがとうございます」
女店員「いえいえ。少々お待ちください」

女店員、調理場へ入って行き注文を伝える。
別の店員が出て来て、ゆっくりとコーヒーを淹れる準備を始める。

まひる、入って来る。

芹那「おっ。まひるちゃんお疲れ様ー」

まひる、会釈をする。

まひる、陽香の隣に座りぴったりとくつつく。

陽香「まーちゃん、覚えてない？ねーちゃんの友達の子ちゃん」

まひる「セリちゃん」

陽香「かーさんのお葬式の時も手伝ってくれたセリちゃん」

まひる、少し俯いて視線を落としている。

陽香「セリちゃん。覚えてるよね？」

まひる「セリちゃん。覚えてる」

陽香「覚えてるよね。よかった」

芹那「久しぶりだね。うれしいな」

芹那「今日からセリちゃん、まひるちゃんとねーちゃんの家泊まるけど良い？」

まひる「いいよ」

芹那「良かった。ありがとうまひるちゃん」

女店員、やって来る。

女店員「お待たせしましたー」

○ 団地の一室（リビング）

テレビを観ている陽香。

襖を隔ててその隣室。

まひる、座椅子に座って上半身を左右に揺らしている。

みぎ、ひだり、みぎ、ひだり、規則正しいリズム。

ヘッドフォンで音楽を聴いている。鼻歌交じり。

風呂上がりの芹那、髪の毛をタオルで乾かしながら座る。

芹那「いいお湯でしたー」

陽香「プリン食べる？」

芹那「あー買ったやつね。食べようかな」

陽香、襖を開ける。

まひる「（「飛べ」 飛べ飛べ）ガッチャマーン！」

まひる「（「行け」 行け行け）ガッチャマーン！」

陽香「まーちゃん、プリン食べよっか？」

まひる「（地球は）一つ！（地球は）一つ！」

陽香、襖を開けたままりビングに戻り、冷蔵庫をからプリンの箱を出す。

まひる「（おお）ガッチャマーン、ガッチャマーン」

まひる、ラジカセのボタンを切りヘッドフォンを外す。
リビングへ来て食卓へつく。

芹那「いただきまーす」
まひる「いただきます」
陽香「あ。ビール飲む？」
芹那「飲みたい！あるの？」
陽香「買った。発泡酒だけどいい？」
芹那「十分でございますー。至れり尽くせりで申し訳ないね」
陽香「いやいや」

陽香、立ち上がり、冷蔵庫からビールを出す。
テーブルの上のスマートフォンが鳴る。

芹那「はっち、電話だよ」
陽香「ありがと。あれ、本宮くんだ」

陽香、テーブルにビールを置く。
隣の部屋へ行き襖を閉める。

プリンを食べている2人。

芹那「このプリンもまひるちゃんが作ったの？」
まひる「プリンは作ってない」
芹那「別のひとが作ってるの？」

まひる、頷く。

芹那「ねーちゃん優しい？」
まひる「優しいよ」
芹那「そっか」

芹那「ねーちゃん東京から帰ってきてよかったね」
まひる「よかった」

芹那、発泡酒のプルタブを開ける。
缶のまま飲む。

芹那「うめー」
まひる「うめー」

2人、笑う。
陽香、戻って来る

陽香「セリさん、申し訳ないんだけどさ」
芹那「なに？」
陽香「明日、一人で観光してもらっても良い？」
芹那「え？なんかあったの？」
陽香「本宮くんがこっち来るの明後日だと思ってたんだけど」
芹那「うん」
陽香「明日だった」
芹那「オウ」

芹那「はっちそれよくやるなー」

陽香「ね。ほんとにごめん」

陽香「あ。ていうか、一緒に会う？本宮くんと」

芹那「え。絶対いや」

陽香「でもずっと会ってないでしょ？」

芹那「そうだけど。でも邪魔になるし」

陽香「いやもう別れてるし」

まひる「ごちそうさまでした」

陽香「まーちゃんお風呂はいつちやいな」

まひる「うん。はいる」

まひる、部屋に戻る。

芹那「はっちも、本宮とずっと会ってないでしょ？」

陽香「うーん。そうだねえ…」

芹那「明日は2人で会った方がいいよ」

まひる、襖を開ける。風呂場へ向かう。

○ ミスタードーナツ

陽香、コーヒーを飲んでいる。

近くの席で、女子高生が3人、教科書やノートを広げている。

女子高生 A「やばいやばい」

女子高生 B「お前やばいって言っていつもやばくないじゃん」

女子高生 A「いや、今回まじやばいんだって」

女子高生 C「ねーシンってなんだっけ」

女子高生 B「え、わかんない。なに？なんだっけ、シン」

女子高生 A「ねーミンは？」

女子高生 C「ミンはモンゴルでしょ」

女子高生 A「そうだモンゴルだ」

勉強しているのかしていないのか、話を続ける女子高生。

本宮、入って来る。すぐに陽香を見つけて手をあげる。

陽香も席に座ったまま手をあげる。

本宮「ごめん、ミーティングが長引いて」

陽香「ううん、平気」

本宮「今日で平気だった？」

陽香「大丈夫。ていうかそっちは？出張でしょ？」

本宮「うん。もう今日は終わった。夜に飲みはあるけど」

陽香「こっちに出張なんて珍しいね」

本宮「去年支社が出来たんだ。その新しいプロジェクトで」

陽香「そっか」

本宮「ちょっと買ってくる。なんかいる？」

陽香「いらない。ありがと」

本宮、財布を持って注文カウンターへ。
スーツ姿の外国人男性2人組が入って来て、本宮の後ろに並ぶ。

女子高生 A 「だってビオレだよ。ビオレなのにさあ」
女子高生 C 「弱酸性のビオレだもんね」
女子高生 B 「弱酸性ってなんなの」
女子高生 A 「アルカリじゃないやつ」
女子高生 B 「いやそれくらいわかるから」
女子高生 C 「肌にいいんじゃない」
女子高生 A 「ビオレがかゆくなるんだったらさ、何使えばいいわけ」
女子高生 B 「弱酸性って他にないの？」
女子高生 C 「さー。ないんじゃない？」

本宮、コーヒーを持って戻って来る。

本宮 「元気？」
陽香 「普通」
本宮 「そっか」
陽香 「本宮くんは？」
本宮 「ああ。まあ、変わらず」
陽香 「そう。忙しいの？」
本宮 「今年はちょっとバタバタしてるかな」
陽香 「ふーん」

外国人男性たち、番号が書かれたプレートを持って空いている席に座る。

本宮 「はるちゃん痩せた？」
陽香 「あーセリにも言われた」
本宮 「近藤と会ったの？」
陽香 「いまうちに泊まりに来てる」
本宮 「えっそうなの？」
陽香 「うん」

店員が、外国人男性の席にパフェを持って行く。

店員 「お待たせしましたー」
外国人 A 「サンキューソーマッチ。アリガトウゴザイマース」
外国人 B 「What's your name?」
店員 「え？名前？名前ですか？えっと、水野です」
外国人 A 「オーミズノ！ワタシノナマエハノーマンデス」
店員 「のーまん？ノーマン？」
外国人 A 「イエス、ノーマン」
外国人 B 「Nice to meet you. So much!」
店員 「んー？あー、どうもー」

外国人男性たち、ニコニコしながら店員の方を見ている。

店員 「では、ごゆっくりー」

店員、その場を立ち去る。

陽香 「あのさ」
本宮 「ん？」

陽香「さっきから気になってたんだけど、そのネクタイなに？」

本宮「ネクタイ？」

陽香「うん」

本宮、自分のネクタイに視線を落とす。

本宮「イヤミだよ」

陽香「イヤミっていうの？その人」

本宮「シェー、の」

陽香「バカボンに出てくる人だよ」

本宮「ちがうよ」

陽香「え？」

本宮「バカボンじゃなくておそ松くんだよ」

陽香「え、バカボンじゃないの？」

本宮「バカボンにも出てくるかもしれないけど、本当はおそ松くんのキャラクター」

陽香「そうなんだ」

外国人男性たち、パフェを食べ終わり、席を立つ。

本宮「ねえねえ、食べ終わるの早くない？」

陽香「え？」

本宮、あごをしゃくる。

陽香、店から出て行く外国人男性たちの方を見る。

陽香「たしかに」

本宮「体でかいと食べるの早いのかな」

陽香「さあ。急いでたんじゃない？」

本宮「そういえば」

本宮、カバンの中を探り、一冊の本を出す。

本宮「これ」

本宮「最近やっと引越したんだけど」

陽香「うん」

本宮「これ、はるちゃんのだよ」

陽香「あーわざわざいいのに。もう買っちゃったよ同じ本」

本宮「え？そうなの？」

陽香「うん。でもありがとう」

陽香、本をぱらぱらとめくる。

陽香「あ」

本宮「え？」

陽香「これ」

陽香、本を開いて本宮に見せる。

開いたページに千円札が挟まっている。

本宮「なにこれ」

陽香「一時期ハマってたんだ。へそくり」

陽香「でも、どの本に入れたのか全然覚えてなくて」
本宮「なにそれ。意味ないでしょ」
陽香「でもね、たまに本の間からお札出て来るとね、うれしいの」

本宮、笑う。陽香もつられて笑う。

本宮「そんなことしてたんだ。全然気づかなかった」
陽香「気づかれたらへそくりじゃないからね」
本宮「たしかに」

女子高生3「え、今何時？」
女子高生2「やばい時間やばい」
女子高生1「あと5分？いや、4分？」
女子高生2「5分5分」
女子高生3「やばいやばい」

女子高生たち、バタバタと店を出て行く。

本宮「まひるちゃんも元気？」
陽香「うん。変わらず」
本宮「そっか。久しぶりに会いたいな」

陽香「いや、会わないほうがいいでしょ」
本宮「え？なんで？」
陽香「だって本宮くんいつも困ってたじゃん。まーちゃんと話す時」

本宮「俺、困ってた？」
陽香「うん。いつも困った顔でこっち見てた」

陽香「いまだから言うけどさ」

陽香「私あの顔されるのすごい嫌だった」

本宮「…ごめん」
陽香「いま謝られても困るよ」

陽香「いや、うん、でも」

陽香「今更言ってごめん」
本宮「ううん。ごめん。本当にごめん」

本宮「俺さ、まひるちゃんとどう接すればいいのかいまいち解らなくて」

陽香「うん。知ってた」

2人、コーヒを啜る。

店員、ポットを持って近づいて来る。

店員「コーヒーおかわりいかがですか？」

本宮「あ。お願いしますー」

陽香「私はもういいです」

店員、本宮のカップにコーヒーを注ぎ、去って行く。

陽香「それ飲み終えたら行こうか」

本宮「え？」

陽香「え？」

本宮「いや、メシとか食べない？お腹すかない？」

陽香「まーちゃん迎えに行かなきゃだし。夕飯は家で食べるし」

本宮「えー？」

陽香「セリも来てるし」

陽香「本宮くんも飲み会あるんでしょ？」

本宮「いや、まだ時間あるし」

陽香「私はないの。時間」

陽香、立ち上がる。

陽香「いこ。車で送ってくから」

○ 駅・改札前

本宮、ベンチに座っている。

通り過ぎて行く人、改札から出て来る人、学生やサラリーマンなど、夕方だからなのか往来が激しい。

本宮のすぐ横、ミスドにいた女子高生たちがスマホで自撮りをしている。

女子高生 B「ちょっとーやめてよー」

女子高生 C「うまく撮れないんだけど」

女子高生 A「インカメラってどうやったら壊れるんだよ」

女子高生 B「まじうけるんだけど」

笑いながら何度もシャッターを押している。

本宮、立ち上がり女子高生に近づく。

本宮「撮りましょうか？」

女子高生 C「えっ？」

女子高生 B「(2人の方を見て) どうする？」

3人、顔を見合わせる。

女子高生 A「じゃあお願いしまーす」

本宮、女子高生からスマホを受け取る。

本宮「はい、撮りますよー。ハイ、チーズ」

3人、それぞれ「ありがとうございますー」と言う。

本宮「いえいえ」

本宮、ベンチに戻る。

女子高生 C「あ。時間やばくね」

女子高生 B「何分？何分？」

女子高生 A「やば！3分！」

女子高生たち、改札の方へ歩き始める。

女子高生 C「ていうかあれなに？」

女子高生 A「きもくね？」

女子高生 B「ネクタイみた？」

女子高生 C「みたー！やばいうける」

女子高生たち「やばい」「きもい」などと言いながら改札の向こうへ消える。

○ マンションの1室（回想）

いくつものダンボールが部屋の隅に積まれている。

陽香、「本・衣類」と書いているダンボールから本を取り出し、本棚に並べている。

後ろから、デジカメを持った本宮が近づいて来る。動画を撮っている。

陽香、本宮に気がついて、

陽香「ちょっとやめてよー」

本宮、陽香の顔に付きそうな距離までデジカメを近づける。うれしそうに笑っている。

陽香、デジカメを手で押しつけながら、

陽香「本宮くんも手伝って」

本宮「これ撮ったらやるよ」

陽香「やめてよー。撮らないで」

陽香「髪ぐちゃぐちゃなんだから」

陽香、本宮からデジカメを取り上げようとする。

その表情は柔らかい。

本宮「新居でーす。広いでーす」

陽香「もー手伝ってよ」

陽香、本宮から背を向け、作業を再開する。

本宮も陽香とは逆側に身体を向け、別の部屋を撮り始める。

本宮「あそこに大きいダイニングテーブルがきまーす」

本宮「ペット可なので猫も飼えまーす」

陽香「えー！私犬がいいって言ってんじゃん！」

本宮「はるちゃんは役所の手続きが面倒で機嫌が悪いでーす」

陽香「本宮くんもやってよー！」

本宮、デジカメを持ちながら家の中をうろうろする。
再び、陽香を撮り始める。
陽香、気がつかずに黙々と作業を続ける。

○ 団地（ベランダ）／駅・改札前ベンチ

芹那、電話をしている。
もう片方の手には発泡酒の缶。

芹那「なに、さっきの動画」
本宮「俺さー最近引っ越したんだよね」
芹那「酔ってんの？」
本宮「酔ってないよ。ベンチに座ってる」
芹那「は？どこの？」
本宮「駅だよ」
芹那「だからどこの」

本宮「家がさー狭いんだよ」
芹那「ああ、そう」
本宮「一人なんだよ」
芹那「ああ、そう」
本宮「なぐさめてくれよー」
芹那「は？甘えんなよ」

芹那「私だって一人だよ。一人なのはあんただけじゃないよ」

本宮「でもさー」
芹那「なに？」
本宮「寂しいんだよ」
芹那「そんなの自業自得でしょ」

本宮「おれ、なんか悪いことしたかな」

本宮「なんで一人なのかな」

芹那「そんなの自分で考えろ」
本宮「考えてもわかんないんだよなあ」

芹那「あんたのそういうとこだよ」
本宮「え？」

本宮「なんでかなあ。はるちゃん俺の話してない？」

芹那「も一切るよ」
本宮「お前冷たいよ」

本宮「おれ、ここからどうやって帰ればいいんだよ」
芹那「知らないよ。ていうかどこよ。ほんとに」
本宮「はるちゃん来てくれないかなー」
芹那「行かねーよ」

本宮「お前じゃねーよ」

芹那「切るからね。じゃあね、おやすみ」

芹那、一方的に電話を切って、部屋の中へ戻る。
まひる、芹那を見ている。
台所から水の音が聞こえる。陽香が洗い物をしている。

芹那「電話してた」

芹那「聞こえた？」
まひる「聞こえた」

芹那「何が聞こえた？」
まひる「なにが？」

芹那「何が聞こえた？」
まひる「なにが？」

芹那「ふふふ」

まひるは笑わない。

芹那、まひるの前に座る。

芹那「まーちゃん、お酒飲んだことある？」
まひる「ないよ」

芹那、発泡酒の缶をまひるの目の前に差し出す。

芹那「飲む？」
まひる「飲まない」
芹那「そっか」
まひる「うん」

芹那「まーちゃん」
まひる「うん」
芹那「まーちゃんは、ねーちゃんのこと独り占めだね」

まひる、答えない。

陽香、洗い物を終えて台所から戻って来る。

陽香「あれ？寝てる」
まひる「寝ちゃった」
陽香「動かせるかなあ、これ」

陽香「セリー。起きてー」

陽香、芹那を揺り動かすが、芹那は目を覚まさない。

陽香「飲みすぎだよね」

まひる「うん。飲みすぎ」

陽香、座る。

陽香「まーちゃん。来週海行こっか」

まひる「海。行きたい」

陽香「うん。行こうね。海」

○ 海水浴場・砂浜

整備され、綺麗になっている海水浴場。

トイレもシャワー施設も、駐車場も、なにもかもが真新しい。

人はほとんどおらず閑散としている。

石段に座っている陽香とまひる。

陽香、周りを見渡して、

陽香「すごい。すっかりきれいになってるね」

まひる、立ち上がり砂浜へ降りて行く。

海の方へ向かう。

潮の満ち引き。まひるの足が水に浸かる。

陽香「つめたい？」

まひる「つめたい」

陽香「気持ちいい？」

まひる「つめたい！」

陽香も立ち上がり、石段を降りる。

まひるの隣へ行く。

陽香「ほんとだ。冷たいね」

まひる「つめたいよ」

陽香、石段の上を指差す。

陽香「ちょうどあの辺でシート広げてさ」

まひる、指の先の方向を見る。

陽香「わたしたちが小さい頃」

陽香「この間ビデオが出て来て。お父さんがさ、まーちゃんの浮き輪。パンダの。あれ枕にして。酔っ払って寝ちゃって。お父さんいびきかいて寝て、そしたら、パンダの浮き輪、穴あっちゃってパンクして」

陽香「あれがたしか、あの辺り」

陽香「まーちゃん覚えてる？」

まひる「違うよ」
陽香「え？」

まひる「パンダの浮き輪、ねーちゃんの浮き輪だよ」
陽香「え？違うよ。まーちゃんのだよ」
まひる「違うよ。ねーちゃんのだよ」

まひる「まーちゃんが欲しいって言ったから、ねーちゃんがくれた」

まひる「だからねーちゃんの浮き輪」

陽香「そうだったっけ」
まひる「そうだよ」
陽香「ねーちゃん忘れちゃったよ」

陽香「そっか。まーちゃんすごいね。よく覚えてるね」
まひる「ねーちゃんの浮き輪」

満ちてくる水が、くるぶしの辺りを叩く。

陽香「冷たいね。出ようか」
まひる「うん」

陽香とまひる、石段の方へ歩き出す。

陽香「まーちゃん」
まひる「なに？」

陽香「まーちゃんは寂しくない？」
まひる「寂しくないよ」

まひる「ねーちゃんがいるから。寂しくない」

陽香「そっか」

陽香「まーちゃん。ありがと」

陽香「うれしい。ありがとう」

陽香、立ち止まり顔を両手で覆う。

駐車場に出る。
駐車場には車は2台しか停まっていない。
陽香たちの車ではない方、ボックスタイプの車の、後ろ側。
トランクを開けてサーファーの若い男たちが腰かけてしゃべっている。

サーファーの1人がふざけて投げたタオルが陽香の近くに落ちる。
陽香、タオルを拾う。

サーファーA「あ！すみませーん！」

サーファーB「お前とってこいよ」

サーファーA、小走りで陽香の方へ来る。

陽香「(タオルを差し出して) はい」

サーファーA「すみません。ありがとうございます」

サーファーA、小走りでまた、車の方へ戻って行く。

サーファーたち、「なにやってんだよー」など、はしゃいでいる。

陽香とまひる、車に乗る。

陽香「いこうか」

車は駐車場を出る。

北に向かう。

周りに家はほとんどない。全くない。

伸びて来た雑草と、盛り土と、「迂回路」の看板。

右側に、火力発電所の建物と煙突が見える。

まひる、身体を左右に揺らしている。規則正しいリズムで。いつまでも揺れている。

(おわり)